

【講演会・シンポジウムを振り返る①】
二〇一三年度名古屋市立大学人間文化研究所
公開講演会・シンポジウム

「現代社会における文化財保護の新しい在り方 ー「パブリック・アーケオロジ」の視座からー」 に参加して

奈良国立博物館 学芸部工芸考古室研究員

岩戸 晶子
(いわと・あきこ)

二〇一三年十月二十七日、名古屋

されているものである。

市立大学桜山キャンパスのさくら講堂において公開講演会・シンポジウム「現代社会における文化財保護の新しい在り方ー「パブリック・アーケオロジ」の視座からー」が開催された。名古屋市立大学と名古屋博物館および地域との連携事業の一環として文化財保護に関する講演会やシンポジウムが継続して開催されてきたそうである。この回では、社会や市民と文化財との関わりについてパブリック・アーケオロジをテーマにして考察しようとするものであった。一般にはまだ聞き慣れないこのパブリック・アーケオロジとは、

昨年、松田氏他による初めての日本語の入門書が刊行されたことを契機に、各メディアでこのパブリック・アーケオロジについて紹介される機会が増えたこともあってか、会場には考古学関係者などの専門家だけでなく一般の方や学生など多くの熱心な聴講者が集まっていたように見受けられた。

欧米を中心に成立・普及した比較的新しい概念で、イギリスのイースト

本稿では、基調講演・シンポジウムの内容を概観した後で、博物館の職員として来場者と日常的にコミュニケーションを行っている立場から、若干のコメントを試みたい。

松田 陽氏の基調講演

今回も基調講演をされた松田陽氏が近年、積極的に日本に紹介し、導入

松田氏の基調講演はまずパブリック・アーケオロジの定義から始まった。パブリックには「公共の」

という意味だけではなく、「人々」や「一般市民の総意」という意味をも含み、日本語では一語で言い表すことができないという。過去だけを研究する「考古学」・「歴史学」に対し、パブリック・アーケオロジとは「過去と現代社会との関係を考え、さらにその関係を改善していこうとする新しい学問領域」と定義されるという。

また、行政が制定した文化財保護法の枠組みのなかで、研究者による専門知識に裏打ちされた法的・行政的に規定された公共の「文化財」に対し、近年使われるようになった「文化遺産」という語には、人々の持つ愛着や誇り、アイデンティティを感じさせるもの、過去を称揚・記念するものという意味合いがあるということが指摘された。従って、この二語は一見よく似た言葉ではあるものの、完全には一致しないことが強調された。これまで文化財行政などを掌ってきた国や地方の行政機関においては「文化財」はみな人々に愛されるべき「文化遺産」であるとの立場から、一般の人々が文化財に愛着を持つことを前提にして教育活動や広報活動など様々な工夫が実際に行われてきており、そうした各事例も画像を見ながら紹介された。その上で、考古学や歴史学の研究はいずれ

も過去を現代と切り離し、客観視して理解しようとするものであるのに対し、「文化遺産」に関しては過去と現在を切り離さず同時並存させるという大きな違いがあることが示された。

そして、考古学や歴史学、文化財と現代社会や市民との関わり方、すなわちパブリック・アークエオロジ的なアプローチに関しては、①教育的アプローチ、②広報的アプローチ、③多義的アプローチ、④批判的アプローチの4種類が挙げられるという。広く行われている行政や研究機関における発掘調査の現地説明会や博物館での展示といった教育普及活動が教育的・広報的アプローチに相当し、日本では戦後から広く行われてきていることを、具体例を挙げて示された。

一方、多義的アプローチは遺跡や歴史的建造物、遺物といったものに対して、専門家、行政、土地所有者、民間企業、一般人など様々に違う立場のそれぞれがどのようにそれを認識し、利用しようとしているのかを探求し、またその立場の差に起因する多様な視点や解釈、利害を理解し、考古資料の保存・活用においてバランスの取れた判断を下そうとするものと言える。

また、批判的アプローチは考古学

や歴史学の成果や解釈を先住民や少数派の宗教など社会的に弱い立場にたつてその文化財を批判的に認知するというもので、ナショナルリズムや先住民、公的機関と考古学との関係などを検証するものと定義された。

今後、文化財は専門家や行政だけが意味付けするのではなく、それを人々から愛着を持たれる「文化遺産」とするために社会に存在する様々な意見や立場を踏まえる必要があり、現状よりさらに批判的・多義的アプローチが必要とされていくという見通しが示された。

パネルディスカッション

続くパネルディスカッションでは三者のパネラーが発表された。

まず、建築史が専門の名古屋大学環境学研究所の西澤泰彦氏は、建築や街並み保護やその調査を例に挙げられ、特に未指定・未登録の文化財の存在と、その保護が非常に難しい現状を指摘された。未指定・未登録文化財の保護については現在ある文化財保護法だけではなく、文化遺産的な様々な存在意義を組み合わせてそれに対する関心を高め保護を目指す必要があることを示された。

次に、考古学が専門の名古屋市博物館の村木誠氏の発表では、名古屋

市における開発に伴う埋蔵文化財の記録保存について、さらに東日本大震災の震災復興調査に派遣された経験をもとに、開発に伴う事前調査が行政による規制と認識され、その規制が適用されない埋蔵文化財特区を作る動きがあることが紹介された。また、パブリック・アークエオロジの実践として見晴台遺跡の市民発掘の活動の例を紹介された。これまでの遺跡の保護への理解を郷土意識や郷愁に訴えてきたこと、それが近年特に若い世代には通用しなくなっているという分析は非常に興味深く感じられた。

最後に、名古屋市立大学人間文化研究科の吉田一彦氏は文化財保護の概念の歴史をまとめられ、明治時代以降、国家の理念によって文化財の認定や鑑定を行うことへの疑問を呈され、現代においては国家のそうした関与はすでに不要なのではないかと指摘された。さらに、文化財の修復や復元に関してもどの程度まで手を入れるのか、不明な部分をどのようにするかなどに多義的・批判的アプローチを反映させるのが今日的なあり方であるという考えが示された。

建築史、考古学、古代史とそれぞれの立場で社会との関係性を具体的な例示により説明され、社会と学問との様々な側面でのつながりが明らか

かになったかと思う。

講演とシンポジウムに参加して

考古学という学問自体それほど古いものではなく、日本での導入からも百年余りだが、社会との関わりについてはかなり早い段階から意識されてきたように思われる。特に戦後から現在に至るまで、日本では一般の人々（まさにパブリック）の考古

学への関心は非常に高く、しばしば新聞の一面を発掘調査での新発見のニュースが飾り、筆者の住む奈良周辺で行われる遺跡の現地説明会では千人単位の人々が集まるなど、発掘調査で得られた遺構や遺物が現地で公開され、かつそれに応じて多くの一般の人々が参加することが珍しくないという状況は海外からも非常に珍しく映るようである。こういった点だけをみれば日本のパブリック・アーケオロジの広報的アプローチに関しては世界的に見ても非常に進んでいると言えよう。これは、原因者つまり開発者とその費用を負担することで、世界でも類を見ない件数の発掘調査を開発の前の記録保存である「事前調査」として行なってきたために、否が応でも考古学や事前調査の公益性という問題に晒されてきたという経緯が大きく影響してい

ると考えられよう。

また、公共事業削減や文化行政にかかる予算の削減、阪神・淡路大震災や東日本大震災の復興調査などの諸問題から近年ではさらに考古学の費用対効果、特に社会還元の度合いが強く意識されるようになりつつある。こうした状況下で、社会と考古学の関係全体を見渡そうとする松田氏の姿勢には共感できることが多々あった。

ただ、今回の講演とシンポジウムを拝聴して、行政や専門家が認定した文化財に対して、人々に愛される文化遺産という対比が何度も語られ、国の関与しない文化財保護の可能性までが話題にのぼった。博物館に勤務し、文化財の展示活用・教育普及、文化財の修理や保護全般を担当し、そして博物館に來られる一般のお客様と実際に触れ合う立場で、今回の議論について感じる問題を述べてみたいと思う。

パブリック・アーケオロジの立場で考古学・歴史学と社会や一般の人々をつなぐのは人々の誇りや愛着、アイデンティティを感じさせる「文化遺産」であって、それが鍵となっていくという見通しや考え方が講演・シンポジウムの大きな流れを

作っていた。挙げられた例はそのほとんどがその文化遺産が考古学と社会や人々をリンクさせるのいうまく機能しているものであったが、それがどれだけ汎用性があるのか、それがうまく機能しない場合、文化遺産になり損ねた文化財はどういう扱いになるのかといったビジョンは見えてこなかったように思う。文化財を文化遺産にできるだけの人々の愛着はどこまでのものなのか。このことは筆者自身が博物館に勤務しながら危機感をもって考えているテーマでもあった。それは日本人全体の文化財を含む古いものへの純粹な関心は加速度的に失われていると感じられるからである。

数年前の東京国立博物館での阿修羅展や毎年秋に奈良国立博物館で行われる正倉院展など社会現象になるほど多くの人々が殺到する展覧会を思い起こされた方は信じられないかもしれないが、これらは大規模に広報を打ち、雑誌やテレビで特集を組み、ある意味イベント化された展覧会ということができる特異な存在とも言えるのである。これに対し、特別ではない館藏品展や常設展には殆ど人が来ないという状況も実際に起きていることで、これは海外の美術館・博物館に比して顕著な特徴となっている。



【正倉院展の盛況ぶり（奈良国立博物館）】^{注1)}

意地悪く言えば、日本人は文化財に対して世界の中でもよりブランド志向が強く、「国宝」「新発見」「最古級」「初公開」…そうした言葉に非常に敏感に反応する国民性があるともいえるかもしれない。実際、特別展期間中の問い合わせには「国宝が何件展示されていますか？」というものが非常に多く、期間限定で展示される国宝の仏像を見たい、○○年ぶりで展示される教科書に載るこの絵が見たい、そんな動機で展覧会に多くの人々が殺到するのが現状なのである。このことはつまり、文化遺産を規定する人々の愛着が、行政や専門家による認定や鑑定に依拠し

て発生する場合も非常に多いという逆説的な状況が起きていることを示していると言えるのではないだろうか。

我々博物館に勤める者はもちろん専門家及び専門外の一般の人々、パブリック²⁾がより関心を持ち楽しめる展覧会となるよう準備しているが、その一方で人々から顧みられない、人気のない、さらに言えば愛着を持たれず文化遺産から落第した資料にも専門家として価値を見出すことが多々ある。明治時代の廃仏毀釈がその一例かと思うが、人々の愛着、文化遺産は社会背景などによってより大きく変動する可能性があり、もし、文化遺産として社会に要請された資料に偏った保護をしていれば、廃仏毀釈の時代のような文化財の毀損や海外流出といった事態が再び起きる可能性もあるのではないだろうか。もちろん、行政や専門家も万能ではなく、その判断が社会背景によって規定されることもありうることに注意が必要だが、行政や専門家も含めたある程度客観的な判断ができる主体によって保護すべき資料が認定されることは今まで通り必要なことではないかと思われた。人の持つ愛着が可変的すなわち文化遺産が時代や社会背景によって変化するということを踏まえた時、文

化財でありながら人々から愛着を持たれないままで文化遺産に至らない資料はパブリック・アーケオロジ³⁾ではどう位置づけられるのだろうか。社会からの要請がなければその資料的価値は下がるのだろうか。今はまだパブリック・アーケオロジ⁴⁾の成功例に注目が集まりがちであるが、うまくいかない部分を多義的・批判的に論じて、議論を深めていく必要が感じられた。

同時に、松田氏の言う多義的なアプローチや批判的アプローチがさらに広く行われるようになるには、具体的にどのようになればいいのかといった視点についても言及がなかったことについても、議論をさらに期待するところである。この点について筆者の個人的な感想を言うとすれば、考古学・歴史学もしくは文化財行政などもつ情報が専門外にむけてどの程度公開されるかが非常に重要なのではないかということである。考古学や歴史学の専門的な情報となると、文化財行政に携わる行政機関、もしくは大学などの教育機関や研究機関だけが独占しているので、多義的または批判的なアプローチを専門外の一般の人々が行うのは材料に乏しく難しい。

しかし、現状ではそれらの機関の

持つ情報公開力には予算の問題一つをとってもそれほど期待はできないことから、松田氏の言うようなアプローチには、問題意識を共有した専門家の活躍もさることながら、マスコミなど各方面も一体となった働きかけが必要になるのではないかと思う。

さらにいえば、言葉の定義だけではなく、今起きている現実にはパブリック・アーケオロジが直面した時にどう対応するのか。その学問領域を考古学や歴史学から独立して成立させたことがどういう意義を持ち、どういったメリットがあるのかということにも踏み込んだ議論がほしかったところである。パブリック・アーケオロジに関わるとされる分野は社会や政治、先住民問題やナショナルリズムの問題と膨大に幅広く、実際に単一の学問領域として対応しうるのだろうか。

今回の講演やシンポジウムではパブリック・アーケオロジの概念と、いくつかの教育普及に関するケーススタディを知ることができた。パブリック・アーケオロジが定着するためにはさらに議論を深め、現実問題に対応させていくための作業が必要なのではないかと思に至った。

とはいえ、ESD(持続可能な開発

のための教育)とパブリック・アーケオロジの概念は重なる部分も多く、聴講者の多くにとってはもう一度身のまわりの考古学や歴史学と、自分自身や社会とのつながりに思いを致すよい契機になったのではないだろうか。

最後に、大学が地域の各団体と連携して学問を市民にフィードバックしようとした企画を継続的に行なっておられることに敬意を表するとともに、このようなよい機会を準備された関係者各位に感謝いたします。

注

- (1) 写真は、奈良国立博物館提供
(佐々木香輔撮影)。